

『悲しみの共有』

牧師 望月 達朗

沖縄県伊是名島出身の版画家、
名嘉睦念なか ほくねんさんがご自身の著書のなかで述べておられる、あるエピソードが印象に残っています。伊是名島いぜなは、周囲16km ほどの小さな島で、住民達は家族同然のように暮らしています。ですので、島の住民が亡くなれば、島全体が大きな悲しみに包まれます。そんなある日、一人の方が突然お亡くなりになりました。睦念さんは、島の人々を励まそうと思立って、当時組んでいたバンドの仲間と歌を歌うことにします。悲しむ人々を励ますためには、できるだけ明るい歌がいいだろうと思い、沖縄三線で馴染みのある軽快な曲を弾き始めました。けれどもなぜか、人々はその曲にのってきません。どうしてだろうとっていると、一人の島の長老が言います。「睦念、その歌はやめなさい。悲しい歌をうたいなさい」。“はて？なぜだろう。悲しんでいる人に向かって悲しい歌を歌えば、余計に気分を落ち込ませてしまうのではないか” …そう心でつぶやきながらも、睦念さんは、言われた通りに、悲しい歌

を遠慮がちに歌い始めました。すると不思議なことに、段々とみんながその歌の輪のなかに入ってきたのです。ポロポロと涙を流して泣き始める人がいます。気が付けば、全員が歌を唱和していました。睦念さんは、島の長老からこう諭されます。「お前はまだ人生がわかつらん。悲しいときには悲しい歌を歌うものだ。ほんとうの慰めというものは、悲しみを共にすることなんだよ」。

ローマの信徒への手紙 12 章 15 節のなかで、使徒パウロは「泣く人と共に泣きなさい」と語っています。「泣く人を励ましなさい、元気づけなさい」とは語っていません。私達は、悲しんでいる人を前にして、何か励ましの言葉を届けたい、元気づけたいと思います。尊いことですし、相手に求められれば、そうすべきだと思います。しかしその一方で、私達は相手の立場になり切ることできないし、どんな素晴らしい言葉であったとしても、相手の悲しみが癒されない、単なる気休めにしかならないという場合が少なくないことを体験的に知って

いるのではないのでしょうか。結局は、相手のなかで、その悲しみの現実を受けとめることが出来るかどうかにかかっているのです。でもだからと言って、私達は何の役にも立たないと嘆く必要はありません。

パウロが求めているのは、悲しみを「共に」することです。「共に」ということは、相手の悲しみの中身を汲み取るために歩調を合わそうとすることです。

「～のために」と、こちら側から助言や解決策を提示して、自分のペースで相手と関わるのとは違います。パウロは、あらゆる知恵と知識に恵まれていながら、相手の悲しみを自分の力でコントロー

ル出来るとは思いませんでした。「キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も」語らなかったのです（ローマ 15:18～19）。なぜなら彼もまた、睦稔さんと同じように「悲しみを共に」するなかで、不思議と相手が悲しみを受けとめ、癒されていく働きに出会ってきたからです。自分が何の役にも立たないと無力にうちひしがれるような時も、「悲しみを共に」するなかには、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ福音書 28:20）と言われたイエス・キリストが共にいて、私達を豊かに用いて下さいます。

～私の好きな聖書のことば～



✠✠ 阿部 順子さん ✠✠ 「私の好きな聖書の言葉」

最近読んだ本について触れます。『お金持ちより時間持ち』、副題が「モノ持ちよりココロ持ち」です。まずその題に心が動いた。私たちは今を愉しんでいるだろうか。人生は楽しむためにある。人間は働くために生きているのではなく、人生を楽しむために働くのだ。命は明日どうなるかわからない。今の時を大事にし楽しく過ごす。その通りだと思う。いくつになったら「あれ」をしよう、「これ」をしようと先送りにしていたら、楽しまないうちに人生が過ぎてしまう。「死」を自覚しない生き方などはすべて戯れの人生であり、今日一日を最後の一日と思って大事に生きる。利欲にからまる多忙な毎日から解放されて時間的にも精神的にもゆとりのある人生にしたい。何でもない日常生活を楽しむ。人それぞれの知的好奇心を感性で、その人だけの充実し

た時間を持てたらいい。「心のゆとり」がなければ信仰心もゆらいでくる気がする。「心の多忙」は優しさや思いやりの心を奪い取ってしまうだろう。

心の多忙から解放されて、いい人生を送りたい。これこそ「お金持ちより時間持ち」なのだ。本題の「私の好きな聖書の言葉」だが、色々迷ったが、ローマの信徒への手紙 15 章 13 節をあげる。「希望の源である神が、信仰によって得られるあらゆる喜びと平和とで、あなたがたを満たし、聖霊の力によって希望に満ちあふれさせて下さるように」。何と気持ちを明るく楽にしてくれる言葉であろう。「ココロ持ち」を表現していると思う。50 歳、60 歳では「時すでに遅し！」だそうだが、今から色々体験し、色々な感動を味わい、楽しみを見つけ、今日を過ごすことにしよう。無感動で退屈な日々を過ごさないよう、自己の気持ちに忠実に生きられるよう、しっかりと心にきざみつけて。

✠✠ 安藤 秀樹さん ✠✠ 「アドナイ・エレ」

口語訳聖書の創世記 22 章にはアブラハムが神の命により、ひとり子イサクを燔祭にささげようとする記事が載っている。しかし神はアブラハムの信仰をみて別の雄羊を代わりに与えこれを燔祭にささげることになる。それでアブラハムはその場所の名を「アドナイ・エレ」と呼んだ。これにより人々は今日もなお「主の山に備えあり」と言う、と記されている。

アドナイ・エレはヘブル語でアドナイは主であり、エレは備えると訳してある。文語訳ではエホバ・エレと、新共同訳ではヤーウェ・イルエと、英訳では The LORD Provides (主は備えてくださる) と記されている。しかし、本来の意味は「神はいつも見守って下さる」の意である。従って神は必要なものはいつも備えて下さるのである。これは 50 年前の学生時代の聖書研究会で与えられたみことばです。しかし、その後の学生・社会人としての歩みの中では教会にも行かず、その真意も理解出来なかった。34 歳の時、子供が通う日曜学校から影響を受け、教会に行くようになり「心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神の御旨であるか、何が善であって、神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきべきである」ローマ人へ

の手紙 12 章 2 節のみことばを得た。さらに、実社会の中でどのように自分は行動すべきかを探し求め、旧約・新約聖書を通して語りかけられているみことばにたどり着いた。

それは、マタイによる福音書 22 章 37 節「イエスは言われた第一の戒め、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして主なるあなたの神を愛せよ』続いて、第二の戒め『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』のみことばである。その後、社会人として激動の中を歩み続けてこられた、70 歳の今ある原点は「アドナイ・エレ」である。

吾妻教会 今後の主な予定

★8月10日(日)CS子ども夏のお楽しみ会

…アスレチック遊び、BBQをします。

★8月31日(日)井殿園先生説教…ご奉仕を感謝いたします。

★9月21日(日)教会修養会…テーマは「礼拝を豊かに」です。

★10月5日(日)特別講演会

…「赤毛のアン、村岡花子」をテーマに、山下智子先生がご講演くださいます。

～どうぞ覚えてご出席ください～



★毎月第2日曜日には、女性の会による
ミニバザーが行われています★



(7月は手作りクッキーやラベンダー、消臭アロマスプレーが販売されました。)

日本キリスト教団 吾妻教会 (創立 1889 年 5 月 7 日)

〒377-0801 群馬県吾妻郡東吾妻町原町 444-9

主任牧師 望月 達朗

TEL0279-68-4730

<http://www5.ocn.ne.jp/~agatu-ch/>

牧師 望月 奈津子